燕石十種

續そつごと

六輯

五

イ普4
679
58

燕石十種第六輯巻五

繪そらごと

つら〳〵人のよしといふ事なれども数寄る画を絵の風流なる実
にて詩をして詩を有声の画と図画は無声の詩といへる
詩の白髪三千丈和歌の常のことなれば浅からぬ幽玄の
秀作として画中なき詩は摩詰が王友の画者と称せり八景と
いへるも瀟湘洞庭は地名なれども平沙遠浦山市江天煙寺漁
村などは虚景之詩歌の感応はさながら化書より出づる丹青の
妙ある和漢共に同じ北斉の楊子華馬を壁に画がく毎夕必ず
嘶して草をもとむるがごとしと李嗣真が画品に見え金岡
が画がける馬夜な〳〵出て近きあたりの田畑をあらしより古今
著聞集に見えたるを浅草観世音の額絵の馬もあれなれど草臥くる

679
58

つくと世ふ法り伝へ張僧繇の絵の新は霄雨晦冥して天ふ地ぎり
常別が書くる獅子は大因くふ〳〵成光が書くる鶴を因てこの
鶴を見〳〵是を学ぶる者多く画の奇法多きこと云ふ是て おと
ろき恐れる事唐僕因田の法〳〵絵ふりける女代見て いと
〳〵ふ人をうぶこうそがめ〳〵と八絵正遍昭の歌七さうふ古今の序
よりこと〳〵くこれをさるこれも伝へをや睦統ふ進士趙穎といふもの
画子の所りて軟藻と一婦人を畜をこれを伝へ〳〵ふ〳〵きふ
かくる女をはまく〳〵おりふ絵ける人のいと〳〵つをを神画ありは
名八真〳〵といふを名を呼て百日中まで八必應ぜん應ぜを百家の
絲灰酒を見よそげ別法んと教を言のめ〳〵をそこて藻をゆり
言笑欲食つるものめ〳〵辛代まく〳〵一子をうむを文の日これ妖之余神
剣あり是代きを中ふ〳〵真〳〵法て四妻八南嶽の地仙と者ふこうを

きこふ〳〵伝へ人〳〵をを〳〵つをを〳〵軟藻この名りて前酒を
たき出をを藻を見をば〳〵で一子を添を名是絵を雅楽舞牧集
正親町一位公通公の家代自法ふ言を〳〵を代を文居り
やどり〳〵ふかけ法ともものあやこあをを〳〵いをぶり〳〵ふ時の
ふ四先〳〵ともの〳〵中伝へを事代書つけて西欲のをを
とをるもの〳〵

絵馬

神前に願を懸る事は支那にもいにしへの神馬幣帛の余風と神事を法社ふまるる弧弩ふ弦をつけ尾をゆひ〳〵でを付るの如ひふ又〳〵り幣馬は板馬のみにて幣帛とする習あり後馬と云るも神馬幣帛なれば上ざ伝の沙汰なれば平人は是を絵に書くまたるる記もりこれを板馬とも云ひ画とも云ひ朝文粹十三に小野天神に奉るの詩を中原長国の献上する文を大江の匡衡の作也寛弘九年に七百八十四年寛政九年迄

絵馬

絵馬三疋とあれを絵馬といふるもそれ〳〵今も祝家の名物に古刀を紙に馬代と称げ金銀をもするも是なるべし又奉ることづける舊礼に馬を画く神に奉るさ〳〵を絵馬といふ是〳〵又三十六歌仙なとをかゝるさ〳〵のかゝちを是〳〵も歌花宴のくづひらる勉絵といふて〳〵と共附詞繩が

神学教要鈔の法院編述〳〵みふ志ろとろ〳〵見ても吳大伯祠圓門の赤ふあり毎春秋市人お章て牲醴すおか〳〵若馬絵馬英人を是〳〵献ずといふ事楊升庵が外集に出せりさ中〳〵の此神は行とふ志〳〵稲と霊験まし〳〵南〳〵崇敬ありるふやさ〳〵の勉絵ども作る中ふ秋田社田のかりあれ庵を御殿ある天智天皇とおが〳〵不思議やもちまち絵をそなへて出もるるとふまる老そ〳〵御簾のうちより出させもひれそほひ弦をけぶ〳〵にてせ〳〵るう社壇の上陸ふおい〳〵ますれば〳〵言のあるとおるれば大蔵冠とおぼ〳〵衣冠〳〵〳〵孫を抱て御前の歌首せ〳〵る天皇御殿〳〵おるしこりとふ事法免那男一番〳〵ふれば〳〵〳〵面〳〵京代法ふ書ちやまれいひあやゆ〳〵をるるともすぐ〳〵おが〳〵そ小再みも強させ〳〵〳〵おり〳〵と公家武家出家あるひい

女人或ハ唐人仙人等まで熟画にありあやしき所出て遠慮なく
なる事細密にさせて見ゆべし皆其さまを作られたれどかしこまりて
かの衣冠の人物やうにいひなしたることぞ見えし而して名高く出るを見れば
大職冠の後に時平の大臣大将のごとくや大僧正行尊右大将頼朝
源義経平忠盛俵藤太秀郷権五郎景政坂田の金時狩野の
平忠澄武蔵坊弁慶仁田の四郎忠経それぞれあまた居ならび
なり又それを見れば小野小町紫式部それぞれ柿若の母或ハ鬼女の
加えてなども婦人の内にやあらん入まじりて拾女藝者并舞妓
役者其羽絵など近頃なむふれたるのハ最明寺殿西行法師紫ぶ
菊慈童と以上のハ仙人七福神近世社頭に其絵のすくなきハなか
めけ出てきらびしことに座をつらね称する時ハ天智天皇勅使饗宴ハ
時代不同しかし貴賤僧俗男女を分ちなく居らしく入交まじ

なり座する八幡に絵の一座之面々なみに出でたる其由は随ぶんよく申すべし
先に明に朕(チン)がいちふるを百人一首の其頃にむかす然れ持統天皇と
おなじく一所にありて活きたる者のもなく其名を残したち
ふさうんなるハよき絵あらずし是ごあまりにんやなぶてに天智天皇よ
り人皇三十九代の天子とも知もひよき宮ひの子供らに玉錦の
絵をもみちやよまされたる御料紙の側にありてる彩眼を墨を付
なき代々の天子のうちでもちとにもゆきいるものを用捨もなく恋ふる
けが衣なるを絵にかゝれつくとめてもやうたるに翔擲九の事にひいちらし
末もる子供らにもなけれどおとなどりし同し洞子をも建福寺をなる
時たゝの御これにすりむびを切て幢幡の石壇に納めなるとくいふ事
中興の天子ともいひけて朕が何のかほ指を切るのぞうかなおもひ
を切るなどいふも身を持さとのハきぬ事 佛に心中をそ云ひけるが

なひ又山階なる天ニして皆がかゝしあつまるなど天狗よさうな
ら出奔しさりの故ゟ出家人迷惑千万なる居るかゝぐもさぞ後代
ニおいりひちがひあるべしと勅諚あれど縁足ニつしんで恐ながら
天子の仰すさへそむきまして人臣ニが義ハそむきのゝす今晩まで之
いわませぬが守屋大臣なとも仏法をきらひましてニむかくをまで
見つけもせぬあるゝ像をとり又もあれぬ本像をよまつしなく
のゝすを致すなおやしんで制しゝニ国の大臣のこともあるべきゝす
あれゝハ使ニしゃニ家しき義なれうつひどの仏物證佛法よる
てついたな悪人の我が法釈迦よ提婆たちよち屋といゝもれ鬼丝
さゝし像ニたくすさ使しき雅相又菅丞相をかきなりの
おやまのやうニする是ニハ迦来世をニ言やニ深ましきなれ
ならし書さぬも出申してゝれていの者ハ合点いゝしたまい

今更申ニおよびませなん今晩なとも以前しもとても申されぬ成
つひてくわゝゝきますが臣ハさのミ論ニかゝゝるもすくな
れきどか使なりの末とて茂の丸の中ニ縁を紋ニ付る人
なとあり今晩なとも申ニ縁を持て出ませぬとい
ふ家申ゝまれぬな世俗ニ申ゝくかくの通りなれど茂の丸よ
縁付る紋所も同じむいきなるべし申茂の通り恵臣が名ハ
鰤をみくむりし魚の名を付るがきいりもの申ゝる君の仰
背ならを井亡されし入鹿なとも海豚といふ魚の名を付鮒の
大臣なとも魚の名蘇我の赤兄なとも赤鱝といふ魚の名遣屋
の連鰤（欽明の仰りの比の人）そのゝち盧井造（天武の仰りの人）又恵臣の孫の房前ハ
とも言さきよそハなし房をふさ前ハぜんりそまぜといふが實
の義すなハち鯊魚の名なるをとなへ謬まり此外ニも魚の名付ゝる

房前（はぜ）

人あるべしとて伯魚といひ鯉といひ孔子の玄孫を
孔鮒といふ祝鮀（シュクダ）といふも魚の名の名付たる大鱸（サバ）鱠（キ）そる仁徳天皇
本兎（ヅク）宿禰武内 隼別（ハヤブサワケ）王子仁徳の弟 飯豊（イヒトヨ）も仁徳の弟 鯊の名を外郎（ところ）といふ
いひたるも及ばざる所がなをうまくとも洛柳を見の字はそもとも
すうもあるいて編笠も見茶をすうきつとうむがかく見は
すうの書りて鎌見と書ても鎌子と書ても鎌子の
字もつるふり合ものすといふふ心を付ずして鎌見一名は
鎌子とおぼえ大系図なども大蔵冠鎌子より一名鎌子と志せり
入鹿退治の付名をとるく赤くする田舎名付なるべく沙汰も
義をいひ時〳〵そもうらいひ付く洛猫理ふも大法志名を若狭
業道が鎌をとるくいふふひ入これは百姓もどふふつして居
れいお意ようく永合せそつりそれどそれ〳〵行成常親を見ひ

鎌見（カマス）

びつ〳〵鎌をとるく入鹿を付べき理のあひるの日本紀も
子磨呂と同付親をとるく入鹿をきるとたゝふ志るきりそ
鎌をおさめると有氏鎌合者ふといふるとゝふひるぶんあるそ
代和つけいひあん義これとやさるれば志くいの大信そうそうは
志るれども後代まてをるそうふいまび実武学ある所の
御像が明意七年ふやれるる時も国家に変ある付いふ
るり山廟ふ動〳〵山像やれさるるどゝあるやさる御る
山年をの動りて志拍志鎌を歌仮せ書紙りて少郎の山事式
像云いて〳〵志代より動るまそんなるにくまれあぢう光の玉緒ぶ
書をひるるひるるるどん悪沙先非式悔るふるぞひるくいそ
るふ見非もごゞるぬが茅竹紙の絵るどふふ耳るる魚びぶ動るり
るるるりるりさるるりかるるるふ海る書ちゝ〳〵三十九りそ
世式去るるそんぶ〳〵画る書る所ふ鬼鎌九右るるくあぶるく

三代実録

大臣めいさ新をあらず三代実録を撰〜〜こゝも実ハ義昔
彼が撰といまれ学者の義もあるものゝ古今集〜〜とゝ
ものゝ〜ふこゝろをくきんと思〜〜ものゝ〜

時平ノ新

ふとゝあるこゝハ自傷ら〜〜なんとゝろこゝのゝふゝと
ゝひ身ハあるゝまい他をゝんどゝきゝが言とハ
人ハゝもゝぞ八雲ハ抄ふ中院のゝとゝのゝまゝこゝとゝんどゝ中院の
大臣を時平とハゝもゝこゝんゝもゝゝてゝゝひゝゝゝゝゝ
ゝせまい和ゝ海をゝの大いけすゝゝいまゝゝゝとゝの

大語宮

舞をゝゝゝゝ〜〜ゝゝゝゝゝ大塔のゝゝ〜〜ゝ式ゝゝどハゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ伊賀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝとゝ敷ゝの中堂ゝ居ゝゝゝゝゝゝゝ
三塔とゝふハ東塔西塔大塔ゝゝ〜中塔ハゝゝ塔ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大僧正行尊

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

其の中に書たることを残念にはあまた撰集に大器のまゝ
よみたるとある人しかるにあれども いかなれバ中にも此頃あるまゝ
かの百人一首にも天智天皇より順に時代のうつりをさきく
書並べられたりと見ゆるにつきてバかり曽祖父の三條院より
またる出てもどういふ因縁あるにや次の座を見給ひし後に
長いあいだには大あるまゝのかんだん頼朝は身不肖なれど武家の
棟梁たる拙者ゆゑ其の年始粗末にも伊豆に居りし時を数を求ハ敷号
ハ行為もあれ世をなす伊豆日記とおぼへ想して右清作とも時ハ
右男の中にござれども曽我乃時分右大将とまでなりたる大てん来の役者
の役割よりどうしてぬ仕方どうけ人の藝それもうてとのハ数
さほど大あるまゝの名をうけ居なつきの長いあいだまでをうで世馬鹿を
つくさせまするも縁のなる人義を卑怯未練なる慈鎮和尚へも

頼朝

つくりしは其拾玉集にござれども撰集にも漏れそれこそ大
されど其ゆへとは志らぬ人もあり日本惣追捕使を申給はり
なる事とは武家のためには大功でござる祖父為義が子孫あまた
持てはなるたけ日本を悉く源氏のものになさんとの存
念よりおもひつきし子孫もすくなし ちと祖父がのぞまれし遠い
昔の恩人のみだりに家礼(ケライ)ども役目につき當事そりゃ人家に居て
ハどうでも公家に家礼どもし官位を押て左り遣はれて関東縣
余り居住致し威勢を継大に致しこれがよいと思ひますで後代
までも武門関東より出き武家一統太平の代には始ました大てんや
大なる思案いたし義ではござらぬなるぐらいの性がござらぬ也中ども
を数し子孫を前し前したは日頃より存る一件此余めがさいてんの
罪ではござらぬ拙者がうんを申しおやぢ殿が小島に流人でおる

を滅ぼすことでありて、その子孫なる先祖頼信・頼義・義家・義
代々、弦巻府将軍として武徳を施し、武士ともの見ひ分の厚き
うどぶらうどもふ少家でい人のんませがおりまして時政
見家で又義朝のあんかんが義経をんくの殘念ふ存さん氏合
点してをうし氏をてやうんて次第で強いて仕見ひをのき
ぐ義経向姫の強るまひ口ひ時うしいひるめおそろしいるぶて
ひまうもまうめうう合点あをど時ぬがいうをさんまひ天下を
自由ふるまうう時ぬのをにまうがを立まうぶひの大ぶるまうう
我らが仕儀ましうんど源の所をして中うをてい入十余て右果
と存ましをうと生く知ると義時ぬをして中る積りでぶるぶ
命がうりませるんぶとのうまうし氏義経少ひ夫ハ世で出ぬり
まんぐ私ぬん大ぶるをおうせうう逃ぶうう拙くむぶい見要

義経

の家ふうう今こそ中せひうう見実を表まうう近ハ存ぜ
るんぶぶより知ぶどを情で日ぬ生ぬばうりハ表て中る積りで見当
の家来日紙うぬてらうすうぶでいぶぶるんぶが見実知ど大
ぶく中ぬふとぶうう前家ハ身ましぬを言銘で死うを
をうて帳表へひうう為のうふぬてせぬての今をううるる孫ハ
韃靼（ダッタン）を責ぬり法ふハ大明を亡しうう今ハ清朝ハ清和源氏の
清ハ字で大唐をも源氏のる孫で表とのの義行の書ぬをうを
いうるもるく通ぬ人のうくやるでぶるうまふ居ましう時ぬ
信心坊ぬ法ハ知ひましうをどぶうちんぐの若殿るるうう
とのあの異の辨でも出現ぬさんをふ結ぬ天狗の院るのぶうり
異様をひうう又条の信をは弦をうんく探子を飛うり法翔
御ぬひとうもるうる事今時のつる流りわうるぶ師の警古ちる

[illegible]自然と身が軽くなりて能登殿は逃げて行ふとすれども
[illegible]船を乗りうつる義経ごぜんと天狗の腕や鼻をのがれうるとかどの
[illegible]ね腕てんごくふ迚切り捨てしこがを人切とて行の中へふもうるね
千人を切てんとうるれども能手象を亡を大全左軍法を盾を
んをとりめて鬼一法眼が拾へ居る三略の書が乃ちさふ娘を母ご
[illegible]りまりへうれ巻をうるる時のうれへさ今の世でうんきが六韜
三略のうろ強子義子司馬法尉繚子大宗問答を七書
とてさらへ本屋の店を寺ちらしてあるが今の世の自
由自在の事ばかりかつていか秘書でありまいるもむり
と今とはきいちがんたへ〜なんが昔でもよりはるかに思んで
[illegible]まへ左門筒を吹へ大をたるどめうるとのあのと
[illegible]りはおいて三州岩の茶師の中る四郎茶師の赤方浮猫

上ちり

理世界のあるへなんでそれふようと浮猫理はぜんと名を
付ケ茶師の十二神ゆふかるとうるへ文院を十二院ふ作りうる
を十二院といふう拙者が丹ごを茶りの名目ありとうり出
へへてうるいうもの名ふ浮猫理の名がありまた依ゆへの
時ないてん初いる友実を用ひ古院より始へうる十二院を二ツ割
の名法と云へ舞はるい三ツ割みてはは番繚より始へうるこれも
のちるい又院とものみ院つきるも分まるを十二院の中へ
きんぜいといふ女がうるをへとうるへ所のうがめいふて
四ふ後の世をきいぜいといふ所へがすくへのとうるふもござる後ふ
とまりの幽霊をあるへうるをうひふつ用へを付うるかし
もさハゲぞといふハうるをどうちるのぬき拾うるへの人ふむうるがめへ云
茶をうるうてへうるひるへいといふ利ならへくもござるね

レイゼイ

鬼魂

忠盛

神(ジン)をゆしだ折〻切拂ふい堂のくさが云葉をうけをすい及ぬるのりと
より行もいふるもござるぬをのれるくひやつめといたくゆるもあ〻
いぎまるくふるひゆつとくいたくゆるもあ〻そのくふ弁芸が折
ねつぎうそうあるふまづと殊数さう〻とあ〻そんでいのりふせこ法
でぬりくあ折をおくめぎそのの不思開であるくあ〻をあゆりもせど
りてくゆくるあつりゆう想くいうくひやくそうり弓弾ぬで名のそく
あるくあ事もあり又ちんぶ思ひもうけぬ御法するもあひまをこの路くバ
忠盛くそち出〻山境の色り拙者い助(スケ)四郎又義の家れうもしとのふ
も伊勢平氏いすぐ見ゑこ殺をもやさまをうくと平家との法するも
かをくまるいりと伊勢ふ伝宗くり〻くで伊勢平氏とくそれを
ゑ羅るくを思ひよせく月のすぐめあるくを飛龍るくあ〻でいたん
くり熱絵あるどふりをくそう姿いいつでも和尚(ショウ)仕法師のむぎうくをか

ぶり油つきをとるくい紙とのくあ〻を書きまんぐ見バ金仏をあ〻
のくものぐ腰痛くふ両家ふ妻くくい紙をるくくい行ふとくく史の先
のくうりりくを云くりあよ鬼よあんどくおくをるくぐ法くくあ〻を
ぎくとくばくり行のるもあい義又せげん法盗を白河院の出くあ
義くを毎ともふぐされくあくあ法院出世の名ふてぬぐを
を白河院ふ入「いもぐるはいくふ法ふくくをみる者」と女をいもこいくある
いもぐるとぬぐるいひくみけくれくくるれくるものくふるをいひけく
くあの院出世くくあ「ぐくくりくりてやくあいるをよ」と作くきてくは
ぬどをバあふくをくくといくだいくくが名のくでくりをくくち入
くひぬどをりくのくくりもぬて人をやくあくくの方くを法出やあい
くべきるのふ作らまて義理連絡の上の白ヤの白を西院くくをふ
くくるの験法をくるるのを出くくあ「験法をくくでくりくくくくを来の

清盛

世ふ清くさうふる事もことをわきまへ

もちものもたくさんとうんどう大うをゝ一般すりぬ言ふ名ふこれハ後ふ清盛

といふ名を名乗る武士ハ

さうふるとハよもむべうなる中一きうくさうといふるがあひ頼之清盛

ふむりふあるせる平氏の旗のもつるつくりことてゝさうわる

田原藤太

ちうより田原藤太ハいやそうるのるハ怪恐あさん地去ハ弓道

よ名をかどこ〳〵未孫佐藤兵衛尉ハ清入道西行が軍勢ハ

夫より小笠原家の弓法末代ふ永く伝ふ弓取のかまれ赤く

赤ふ所ふ田の橋で軍まれ龍ふく手つてむうで返治ふ義

世ふ弓ハ勝ふ〳〵ふ名りおふう明松三郎が程二郎ふそ中ふ

清のゆくあふりの龍女嫁をさ〳〵て迎有名を二郎ふこりまふさい

まつハ皆おのきふた方のふふとふ〳〵と見ふあふき見ハ百足の

蜘の化ふるふと人清ふ十文束三伏ふ〳〵ばりりふ

眉ふの毒中を射ふるるでふふ目を射ふ中ふ

答をうふ〳〵ふ立ふり名ふ二の矢をつがひふ一ふもふふぞはぐと

まふの矢所を射ふふ矢も又おどり返ふ〳〵たるふいふせんとお

りひふふ泥と薬ゞ中〳〵ふ事ありて三度目の矢先ふ嘴を仕ふ

てあふ一矢つがを射ふふ矢眉ふのふで中を貫り喉の下近羽ふ

ふせめて立ふり名ふ二三ふ人ふふい松も怨消ふ亀のどふ

ふふふの名ふ吉大地をゆゞふせふりふふりてふふふふと百足の

蜘ふといひ伝ふふの二三ふのふいまふりふふ亀のゆくあふふの

うごき来ふふ武むうでと推量せふふふのがふかんふふ強ふ

ふを推量せふゆゞ矢さふふ蜘の子ふも出ふふゆゞ身ふふふ迷惑

あゝ矢さきふつふきをふきうけふく射ふふふといふ後ふ既ふ仁徳

天皇此時高麗より渡つた鉄の的を盾人の宿祢に勅ありて
射させられたる義国史にも出てをり虎と見て射たる矢は石にも立
ちたけれどもむかでの身にたゝぬ矢は弓矢の名折しるしもなく無
念至極の儀つゞきを附て射通しとこはあんまり挨拶べき
ことで弓矢の名誉ではあるしつゞきの不まちをといふもんそれから
龍女よりそれにとらせし絹一巻鎧一領俵一ツを持て
絹をつくれどもつきぬ俵より納物出るはつきもんござるが拙者も
家来で名あるもの家来どもが出してつかへとも絹一疋納物一俵が
ありがたいとので御ざるわんまり小身代の秀郷平素平親王
将門が叛身と申して切ても切ねからだの持主米嚙を射
射亡せし時の狂歌に「将門は米かみよりぞきられける俵藤太が
はかりごとにて」とよめるは米かみを俵といひ出しものでござる外

でもあるまいといひかけしので全體田原が名でござる末孫の
田原の又太郎忠綱がどうしたとき人々申ますに我々は米苞
の藤太といはれる縁からうつりしすみそのうち右此狂歌も
至て後につくられしものにて時分の口あひではござらぬといふことを

権五郎景政

ば権五郎景政が片目を失ひし秀郷の仰らるゝむかでを此弓勢
で射通されしおつゞきて此利運の始まりも此勝負は此もと也とは
おそれなく鳥の海の弥三郎が逃かし矢弓勢がようそなわれ
たとへ眼にあたられどもうしろへ射ぬかれぬを拙者が仕合あの
上で矢抜ぬうちに三日三夜逃まはつて弥三郎を射ころしたとは
おつとりにもありのしくの矢を片目にとて矢が立んと立て
居ても痛うしとさらつても我子にあるでごさりければこそ
抱ちよつと目ん玉がをへてさへ我子までござるに拙者がつぶれと

坂田公時

流柿

いと和をゆしうとうつくしいものでもいとこのものと
いとふかいけうとまれないまづ程のあいまと赤ら顔で坂田の公時
まつ毛顔で柿売りどもめつきつよい様を人がやかましく所か
もやぶりの大麻笠とその流さ紀見ぞのやうふかもう行ぞといふと
縁が智恵でるが消るやうふかをご縁を新系とので縁が引巨
してつるいしとその手絞柳ハ志波柳といふるい名書の一冊
ふあるあり多田桜津与及のとうと江天ととてやへうるおのこともの
中より公時といふおのつくり智ありて家とうう調といふハ新系
るあるが公時ふ心の別ふあるやうに式しへとといひられを公時名返芸
ふんの別をあるちんとおりそぐ膳病を習へといひるをハ縁膳を
もうきりと言うのいけきうを智ありとかいうこ思いでるい
が実説りて縁よさえ膳病を習へと教へうを柿売が所うを砂りか

牡ノ早太

事すべきふあるべ世ごで常ふ用ふ式膳病りせうといふもひる
でござうあちうこちうふ沙法と鬼と三里の灸すへさせ申うう大
盃式引うへての程寄酒のうへが酒ようくてもうとい男ぶりへ
牡の早太忠澄ちカぬきうう丸い目式引りうへ秋ふりう
ふいやつの中うでハござれどもさいうるやもつうまつうぞうへ人
頼政迎清院のれう様ふ中ふて仰をうけ結り雲中のあやつき
うの式対をとされかいらい猿むくろいあき尾いふ物申うを白足
うを虎乃ざうくふうくふ声ぬえう似うえくもあだけをあるを
どもこれをぬえというを行ぶ人がうけえませ一神仏とも名の付
やうのあいふいえ世和とやうをうのあくあがぬえふ似うこだうを後
二條院のれ時ぬえ様ふ中ふ命ふいてうだうくく農穂をあるやまく
あり先例ふまう世又頼政ふ仰付うを射うせらをうちくめい

武蔵坊弁慶

ぬえでハござるゆのもじめのだけとのを弓人が射こうると所りく
義経元るゆまをつくとうくあておさえつくもこぶくもこうを
れくとつづけさるふ九力ぞさいこりりとりハ人を切さえ九ヶ所疵
をつけくこうをハようくおさまらうとのうさ方のうろえうぞござる
くけが精の程ハ又い為用あのだけとのりうとも九ヶ所でハあく
一ツ所をつくくがそれも一力ふさくこうをもこぶ一ツ二ツ三ツほりみり六ツ七ツ
八ツ九ツとうぞくるもおくくまをる細らくくえい九字の数えと
いくんのあるも程おくくきるる九字の入魔きけもあくあき
きる事と横るをうてバ拍くるる力ハどうくうりと義経むくく拍
弁慶ハ弁慶の橋のおりひハ板のるゆをあくくあ長力杖りうき
義経元来歳ひる義あり三塔の優僧といえん義経者ふつえ
右等式殺くゆ義経南所多え一枚打盗の業ふおかてハ天永紀

仁田四郎

業の例ふゆうせ一枚を伐だ一枚を切べくこ梅の制札四郎南
ともこの義ともあくくあくこ所今ハ板の制れこハようくてもゆぬ
るいうるをだけきくふ七ツ道具といふ物をせをうせつく拍寺
殺ハ辻番の者どをこのけのこ切さんづるる大工ともえ人きうハ
ひ伝ひ物でハあるまんくゆ殺の拍方ともも七ツ道具あんが走去でも
ひくるる為用でもあいあを脊頁てハ方うどくもも不自をれる
今ハ懐中小刀を近七ツ道具の名あり連歌の付合ふも義経ゆ
七ツ道具式牛若の小方刀一ツでありくくるふ付ゆ牛若の小方
一ツを義経ゆ七ツ道具ぐく付うあくくとい時ハ方ゆのおいを
弁用ゆや拍伝うくくあせるるとまの義ふあつていえを仁田四郎
忠常義経をれでもを浮ハ堀川殿付の画ふ古伝坊正俊をつう
まくて尻馬ふのくせらきくい小きもうく見くくぶ力の

小野小町

しゝのかく居る故に浪なる事さらしむかのかく尾づゝをいつの
まくら絵すぐさみの志ゝどりがみ比志ゝの尤しる所をうしろ
わしをうらしく引たり是千すもだしかいもいとしき故設すもさやの
めがカハ首の方にある虎力のなんらし後足をよし其二其三にある也
のかたちに牙があつくしらる獣の尻のかたちをむひて尾づゝをつく是之
ことそたちまちすがたり旅るであらふかと見えるやうなれど狩の
志ゝを見るとのが余まいらしろ向にのる事比よし忠常ととハ狩の志
とりの是よ家にこそ武勇のつよいけれあるびとよその評判
故世のくげに只ならまずぞ狩もふくるまし男のかいまづ是を
みて次ハ女人法師紀人ぞと居かをりま志みよと入ぞりける
ゆゑを見をば草紙をかひで浪小野の小町の絵口なるをう
ごうしくいちハがるぞ故七小町とてそとりよとも世ぴきぴやさ

八雲御抄

事もない歌を中にも「浪のなくに行故の称とてうき草れ波乃
うゐし生志ぞるらん」とよめる歌萬葉集にありと擬せるき手を
草紙を洗ひてをれば其歌の文に洗落て入筆のむしのぶきたる
ものぞさらしおほえの歌いる一向其の事を志らねものゝつくり
ふるあるを虚しむりし世に志ゝきたる小町がいかゝまるなしまと
いふものづかふ文字いひ出すべきものあらぬ波のうゐしとハさるど
めて波のうゐ称ると倍まいふものあれど田畝をよせく波のうゐ
生茂るといふそらるいひしひ歌紙いひ出べきものとおもはてハ
迷惑き順徳院ハ歌在中古の名人にておはしましけるがいろちなる
又より所合ふあらけ給せなくるとは義は浪じて生より故に歌よくく
まきらせなのあるよし八雲御抄にも書せなくりそれよるなづしか
まらなししかの歌などしあれどは歌ともなくて墨の付き跡あるんぞ

旅なるにあらざる理かなる義はいひつくしがたし此余の要をとりてあら
ひはさずむかしよりの伝ふなしといひ所なれ俗なるもおほし其に従ふ
小町の名跡つくりよせたる元祖し拾芥抄のまゝなひの所どもうち
ふたりえびに万葉入集のむかしへのれふりといへども此外七小町古首の
うたもむかしへ又小町といへどかなしいきのうちふりぞくらきおや子中では
きしあひの世なふいたるまことにあらしきの哉の胡粉もあらふそて申されば

紫式部いやかはりしのめんなくなにゆゑ源氏ものの絵を石山寺にて
通夜して書とて大般若経のうらに須磨明石の二巻より書はじ
めたるの事佛前の仏経をごふして草紙の志しがきよそのぞ
すなああしよりて石山寺にて通夜して湖水の月に趣向うかびて
書はじめたるとは世中の俗諺を人の志るべきやうもなし其の外の
一説見ひろきに紙河海抄よ料簡とて書のせあり湖月抄といふ

世の桐源氏かる折節の名ふさへ外よりまでるはいかなるにや其外源氏
書てたる元休と俗説と数しのちがひはうちにやてそ源氏の続釈
をするもりあれど中ますぬが女三の宮の絵はいけなきもあるのへ
おしだりりりまでは猫の綱を引て立のよ此俗画にあるは大きな
んなる遠いのなの長紙は猫なさればおさな猫のまさるなづなをつなぐ
ぎ立のへるを大きな猫をおけまてつなのこととがさけつなぐ紙ひらけ
なびらしまするそをもがくすふりるにそはきえ書まるあらざらおくに
立てみてゐる女三の宮を柏木右衛門督の見給ひよし紙書てる
なり又今やいふかさるなす世俗の琴のかり中に柏木の冷がまき
をとんとけまきは鞠を枝にとめりてまがが桃はちるをあるりとい
不及川村検校が柏木の鞠はさつきの木法なる紙らのとをあやまき
なまた花はちるをあありといふふべきうとさる人々尊されればいや

女三宮見そめ給ひしころ琴の音のなつかしかりしを
思ひ出でて見給ふるにもあはれなるべき夕ばえの
程なるに花の下ふく風にまがへる音にて
はなやかに吹きたてられしにまさりて
やうやうちぢまるほどにいとあはれなるべき
ごとにいたりてをかしかりしかぶきの
おもかげの変はりにたるなどの
あるべきなるべし
ちんの女の扇にはひといふ名ありとぞ
ちんの女の扇といふ名ありとぞ
秋の扇のすさまじきものにいとぬ
ふいなるものにて名ありとぞ
のるを行ひつりませるといふ
般若面
名人能作のものにつけられたるにはいとものすごく
事にふれたるものの名遠ありとぞ見ハ蓬の
のもとに一本の鬼女と蓬のもとを
霊の鬼女を大般若経をよみて
おそろしの般若声ものどいとさけをおそろしく
ろしハ美女のけさやかに般若よりも又うとを
ちぢまるほどに鬼女の面ふかきにて見るにつけて顔ふぐしたるものの
かはりぬるにつけてもいとおそろしく小町紫式部
小女郎のかたちにて侍らんにかはる
ゑにも居たる十年ばかりのうちにふるさと
侍りしを今の画のそしるもあるべかり
侍りしをむかしの絵のうつしとあるべし
鳥羽絵
とあるものも鳥羽絵なるべしとあるは男女の扇にそいひなる

我ホウ姿見獻修ホウ〜せもひ〜より修りて聖ものあ〜たを用よ
近来はあまり粗ゞるすゞもあれども見まぐふとりたゞふうれ
うるものあ〜あつぐんものあ〜大ゆげものあ〜美女ものあ〜美男も
あ〜すものあれの本のもの〜といふやうふ心をゞゞといふもたゞひて

寂明寺殿

最明寺殿例〜近畿中の姿ものすて立玉法ひさき祇うう皆〜の
ものもの〜をふらゝゞゞで西行法師と二有よきいて居て出やう〜と
あるゞゞつあでものておそかりやう〜と西行とつまゞちて出今
ふかゝゞかり〜此坊主氏絵ものゞ二百六十あまりの古入道と見へま
するゞりまゞ世を去ゞゞ付が三十七業りてそまゞの事あんばゞゞ
の用むものゞ除ゞきゞゞいのある時ゞ玉づきゞ者ゞゞぬ人ゞ又ゞ孫の
さゞゞ入道ゞゞ付も三十一才で仕上まゞ〜ゞがゞ平記ホ田ホ氏りて拾ゞ示
ホ日十有余の古入道と書ふりゞゞとゞきやうホ書ものゞゞれ神の本の

うゞひる物樹松のるありて蓋承修ものとゞゞりホハ物主松も
樹丸ゞ三人見中をつゞきるも物ハゞびさらゞゞふゞゞ世の中ホ行ゞそ
松ハつまゞかゞゞゞんとゞゞ神流あるゞゞ〜世ゞゞゞびゞホゞりまゞ〜るる
ふや松竹物を一對ホハゞも松毒を一對とゞ物竹を一對ホするるハ
あんゞも松竹物の三を一對とするる画子の筆のあやホ出るゞゞ
人作りゞ法玉をゞをゞふめゞゞる事も書中総義ものの一人張ま
あるゞゞ方迎ゞゞるゞのゞゞり〜古法ゞゞる義ゞ法の世ゞもいひ法玉
のるゞ氏も所記をまゞずゞゞゞ見ゞゞ世ゞゞ張ゞいひものゞゞゞゞゞ

西行法師

ゞゞものゞ〜ゞゞ海ゞゞゞゞゞゞのゞ物ゞりホ西行法師物修も法玉を
除ホハゞ〜ゞ左絵ものゞ尾ハゞゞゞ氏世ものひゞ今ゞ付
の殿人坊ゞゞの殿多ゞゞの有ゞ海ものゞゞホゞゞ法玉除ホの殿見へ
ゞゞ方ものゞゞゞゞゞゞゞゞゞ尾のゞの法水ものゞゞ柳法ゞゞ

とてこそ世を遁りつき」といへども遁世者の如くに見せかけ業作せよ
宿せざとて木の下にも寝を定めてハ居らぬ也此御坊の
流水の優艶なる事あれバ世を遁りたる雅情こそおかしけれ
織り西行の家なるべしとて新古今に歌も西行と入るるの外是
ハ官女の清水のりと云ふ君にもあり歌を詠まてよめるよしいふもの有る
其下の悪説何法の有りしと今の世にもよく知りていふ人もある
ハなぶる事なるぞ思ひしく遁世御坊(トンセイヤンギヤ)なとといふ者の欠ても有るとのて
こされぬ家の供で法師でおもしれせし世にも末代の人ハ有る事なし
今もむかしもほどある家であしがしれることのでござらぬ西山
宗因が連歌で後世出来る誹諧の祖とした口まらが世にある
まちらふ後の事なれども誰のことしぬ世にそまって皆其り侍りぬ
其家元なとふ門人多く出あつまりれて涸沢(ジョウタク)するござるが本知も

なく浪人師匠なとの家がありでハ四ケ程書續をきくハくり自習師
匠をもするしわり家だうり多くハ商人業も批評も編纂でござる
四恩の御も成ましそのうち宗祇芭蕉いづれも秋ホうするそし
なるまし是も世にとでまりし後の名まししめさて居ふいづれも今
銀自由乃ともの大もの成べし遁世源氏をてそれまでともまで今
拙が第一でござる世を捨て山へ入ても云ふものがあれど世之文字でハあ
りませぬさうがなれバ伯夷叔斉が首陽に餓死するより外ハなれと
見へますする工夫する肴でも今の名をしきまとへハ下の名ハ其の家人肴でも
中々ハ其の昔のものと思ひの外西行るともそ多し居程く銀の
禄こも類朝もそうとうわれても惜しげもなく門出るども世もまさ
と偽ん者の人々がそくうなる肴でハ他人をまれいふとおり又皆丹
業を捨て他流がするのと列仙傳にもあるくしえられど新ござらくない

もあてハあるなるべし王質がとゞまりてかへるさ棗(ナツメ)の核(サネ)のごとくなるもの
とあれハ狐のあやしき勝まてハあるまじ李鼻帝(リビデイ)が九菓ハ病をいやし
といへども不老ならずを丸めしと聞てハ前漢の方なとのやうに世ふ菊慈童とて
菓のかをきたる童子の画ハ是ら其用の穆王の慈愛をうける
童子なる菊慈童とよばれ彼の名ハつたはるなりハ是も八百余年を経
ふるうちふハそれより彭祖なるものと人いへども彭祖ハ列仙伝ふの世
て殷の末まで七百余歳周穆王道をとふ共なる所あをいふてのち後
七十余年ハ人流沙の西ふ見ゆるとあれども彭祖凡八百歳わたり
八百歳といへども彭祖ハ殷の末ふ七百余歳周穆王后をとふと
いひ伝たハ穆王の時童子なれば我を大まつ後のとみ之同人の性よ
いふハあやまりなるべし穆王の寵臣をうつくあやまりて此称の
ことをあらへなる罪ふより酈縣(レキケン)といふ所なるが其王程あらはれて二句の

菊慈童
彭祖

偈を授けそのふさびく是ゆゑ書付させる菊の葉の白露落て流るゝ
谷の水を汲て長寿を保(タモ)ち八百余歳迄慈童が年のうちもありて
裏宮の姿なりしといふ事近くハ太平記の十三巻ふ出たり南陽の酈縣
の水ハ風俗通ふ出たれど事文類聚(ジブンルイジユ)続集(ゾクシフ)二十七ふありかれこれとりあ
つめたる説なれども慈童つゐふよりて流されて長寿を経たる
なりしぞめでたけれ不老へハ四方のぞ菊慈童の画ハいまはしきとのことと
きこえけり人もあるふむ無極くとまづかういひてまた志られぬすぞて
仙人長寿の数ハめでたく思へれどもそこふおちて王質(ソウシツ)が山ふ
入て其斧の柄がくちたりといふ世の中ふハ是を志るべき月
日か立て八百年でも王室の義え日本でも浦島が雄略(ユウリヤク)の御代から
淳和天皇の天長二年まで三百四十余年なりて故里へ帰りたれど
家も故旧の者もなかりしよし浦も島も海辺の事にて浦島を

いくも名すたいかゝ海辺のいやしき一人の漁夫うら人る世界の外る
数百年を送りて左へふ浮りても絵かきるかるやあ方朝ごる
列仙伝の西王母が條ひみるんだ三千年ふ一度このる桃ふ三つぬ
すむといへるより九る巣といへども巣里の化をる所すして巣里
をえぐるる日十年と大伝ごが武帝ふ答るる〳〵列仙伝ふあんだ
西王母が桃のうつるふ〳〵九る巣といへども人るふありしるふ
の種とさのるらるやむへきふあらんとあるどの如徐氏他人ども巣
球くも今使らふ山一不の山岳のまちがひふちう〳〵巣るのいひあるがそて
服養先生ども列仙伝ふすかいも候先生といへるえるる方先生
へるのるのるんふぐるるどもさぞ巣〳〵さんるる巣ども
かきたるるふ〳〵しりゆく遠へ服餌絵ふえるだり書てつるちかる
〳〵絵そるるのむるる今の世ふも巣びつるひあんどかへるつるひあん

猿拐るの自分のうるるを吹出する列仙伝ふるを世るるるて
人るるるる今の世の人世西芝居でもゆるるるるふが自分
るぐさみだりふ除もるるる毎日吹ゆるるるゆ吹ゆるる巣
るる事ぬぐ〳〵武志士のまき布を搗るる孫楠の大るふ巣るのるる
ともあぐるいつぐ琴るる鞋ふのるる巣るる又赤鞋るのる巣安い鬼ふ疫
を盧敖も鬼るのるといへり鬼ふ高を黄長房といへどもひるる房ハ
壺ふる酒ひるる壺ふ入るる人みて後ふ九月九日桓景る巣るる菜萸袋
を腰ふけるるるるふのぼりて巣花酒をのみて禍をさけ〳〵人鬼
ふ高て巣を吹いるる高を知るる巣るるふ他人の知るるものと
又人て為家ふの鶴の大伝ふ巣記ごそつけるとて他人のけるまりの孫
鬼ふ地をおかするる成けるるの井蛙抄ふもあり又鬼ふ海て
帰りしふ丁令威之張果ら白弱ふ巣るるふあるど瓢のるるる弱を

仙人のうらまし

井蛙抄

出ゝる列仙伝ゝを見ゝ祢ともむらしうの世ふいひつゝふる所あり張
九齢がぬのをもゝみゝ蝶をあまたゝびせゝに今もよくもゝる白づま
ぶゝ毎つゝひまて初年ゝ石を羊みゝる仙術といゝて大きゝるゝ白ぶ
ゝ所ゝゝゝれどの数をもゝるれぬゝゝうゝやあゝとゝびふあゝをいふ久茶
の他人いゝそんでも皆白いゝゝ蕪を多数所絵ふもかきゝ人ゝも
又ますゝむゝゝゝゝの拙志がをゝ一角仙人ゝ志ゝ例もゝゝれ
ども是月乃の拙初の出所のゝふ拙を所やゝれ其さ紀ゝ志ゝ
ゝゝひのむゝ咲のあゝゝゝすゝ優言ゝゝかゝもあれども いゝふも
もゝが好知ゝさて一たん他人ふもゝゝゝのゝゝゝゝの女のせんゝゝて春
ふゝゝゝゝゝが白いゝゝゝけのゝゝゝふゝい是ゝゝゝゝゝゝゝまゝゝゝを
見ゝく目をまゝゝ雲のゝゝゝゝゝゝゝ不想ゝて他人の画を奇ゝ不思後
ゝゝを他仙の所をゝゝをかゝくゝのゝを拙志ゝゝゝゝ画紙ゝしゝゝ

ゝゝゝゝの所をうきます行も表ゝゝいゝゝゝ雲ゝゝ歳ゝ不外芸ゝ
ゝゝいゝゝゝ国果でゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
祢を久茶の他人ゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
鬼の金仏をかむゝゝの作の一流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ光琳軒ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まや行徳浦にもあれいあみしてとうひさいとのとうき浦おうるの
いやうるもむこかして奥のうかふうるもうるたうら船うどき出るとん金をそ大王
天ふづもうをふうりあげるひ我おうるの大あるむものうとうあうどうもいひてうきの
王ひをゆうるるれうるこより水徳をつうるさどんだ金生みうて金も見うり
ワきゆうるもづうるうるさうらもワきゆべくきゆべくの蘆中ゆのうるといふる
学へうるが寄ふうくかうく女を大王いふいいうるう事を山のうるの日新もさ
らぬうう王かううくかうく亜ゆうるやあらん矢の根ゆ帝のううりゆうふ
ぶんびゆ式ぬゆ意外うるのというんむうくのうび長地ゆのせうふゆ
大王度のづきんをうんだあうこまへうるのうと吹出のゆつもうるうるをいうう
ゆワうるゆ見うゆ式もあうびうびもゆ親式ワきのゆみゆ多りうるが
きうるゆ昆沙ワのうびうつきんゆ用ゆうるううふくいゆていいどうふ
福禄寿いうるやきうゆ使ぶ入弁紙天うる母まんだうう波のり母の嫁

うふうるうといひゆうるうるも亦人よけうるうくまへゆもあうるどくうりふまで
ワう神ゆワうゆをいうんうゆあうびうとあうるうる見体のいうもうる不ゆうゆが
き亦のうゆ式の神ふりのうるめうあうといふ家も行のうゆ中ゆ正月二百の初四発ふ
ゆうき藤すうるあうゆくゆ義ゆうびうゆて悪義紙若義ふゆうゆうんうんど一
首のワけ学へゆ家ゆうるこうの神ゆりうるいうるゆ神ふりうゆあうるのり母
ゆいいうゆあうるゆ源うのうゆゆ母ゆあうべき意のゆくゆのゆもゆあうゆもゆて
見へゆの家というるのゆ学へうゆうるうるのゆうんど別ゆてんゆの学へゆ家へうるう
ようゆうゆかうるうゆうるゆ用ゆうるゆうるを家をゆうるゆうるのゆ神学ふゆうゆ
ゆうゆもゆかゆゆ見へうゆいうゆ神ゆもゆうるゆうゆて三十一字のうゆ十六字のをうる
ゆうゆうゆてゆいうりへゆせゆいうゆ神ゆもうゆまうゆうるゆへ大うゆゆ学へゆ安うるゆを用
ゆゆゆして人ゆゆうるうるのうゆゆ家ゆいゆうゆでゆも意ゆゆのうゆのゆでゆも意ゆゆゆゆゆゆ
使ゆうるゆうゆといゆゆゆゆ一月初日の夜をゆゆゆゆ二百の夜をゆゆゆゆ古き

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世書を石卿遠江守廣道朔侯の著述あるを紙上に
享和二戌年四月　　仁画堂

文久二年壬戌十月十八日流覧一過　書僧活東子

明治二十二年初夏　　筆者　　妻木頼德